

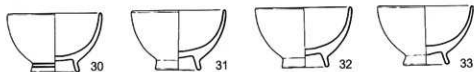
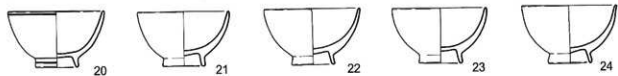
第52图 II区SK1出土陶磁器① (1/3)



第53图 II区SK1出土陶磁器② (1/3)



第54图 II区SK1出土陶磁器③ (1/3)



第55图 II区SK1出土陶磁器④ (1/3)



第56图 II区SK1出土陶磁器⑤ (1/3)



第57图 II区SK1出土陶磁器⑥(1/3)



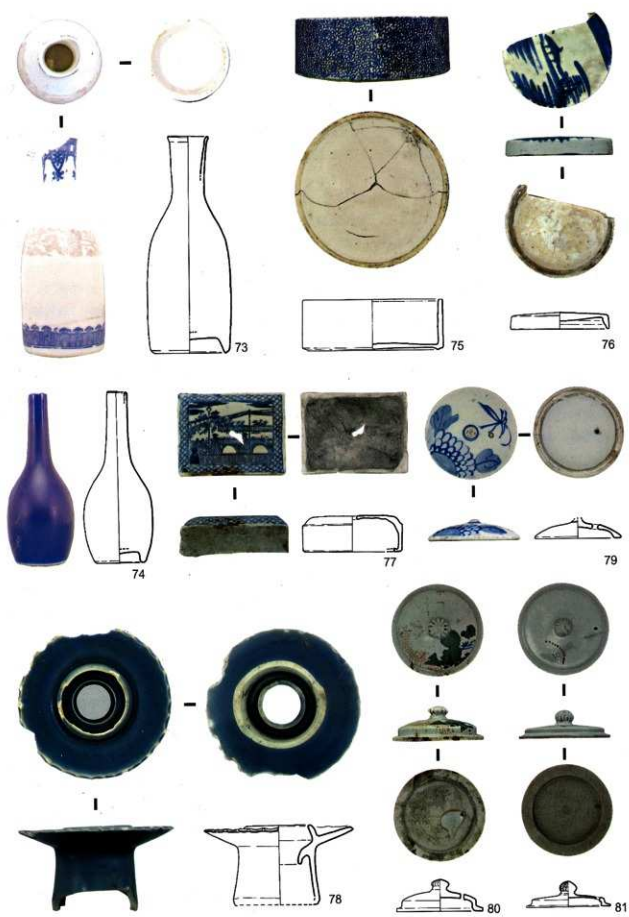
第58图 II区SK1出土陶磁器⑦ (1/3)



第59图 II区SK1出土陶磁器③ (1/3)



第60图 II区SK1出土陶磁器⑨ (1/3)



第61图 II区SK1出土陶磁器⑩ (1/3)

SK1 出土硝子製品 (第62~70図1~151)

Ⅱ区西部の斜面にかかる付近の北端で、重機による表土剥ぎの際にゴミ穴 (SK1) を検出した。陶磁器については前述のとおりであり、ここでは硝子製品について報告する。硝子製品に限れば、完全な形を保ったものが多かった。小型品が多く、故意に割ろうとしないかぎり廃棄するまで完形品でありえたのであろう。完形品を中心に図化した。

特に断らない限り型吹きで製作している。つまり、底部の外型および縦方向に二分割した2個の外型の計3個で合体させ、その内部に硝子を吹き込んだあと、根本を折りとり、口縁部周辺を加熱してそれらしく最終仕上げするわけである。

化粧瓶 1~13はホーカー液である。体部は斜めに外型を合わせる。側面の相対する面に「ホーカー液」・「堀越」の銘があり、底には数字の入ったものが多いが、13だけは「堀越」となっている。体部を水平に切った場合はほぼ方形で、次の14が凹んだ長方形になるのと異なっている。ホーカー液は1912 (明治45) 年、東京の堀越嘉太郎商店が発売を始めた (高橋1977) 美顔料・白味剤で、大正時代に流行したらしい。5には薄黄緑色のラベルが貼ってある。少し欠字箇所があるが、当時の絵入り広告 (第78図) も参考にして「THE BEST/ALBUMEN TOILET/HOKA/ホカ/Render skin as/white as snow/PREPARED ONLY BY/K.HORIKOSHI&CO./TOKYO JAPAN/MADE IN JAPAN」と読める。7は内部にコルク栓 (径11mm・長さ13mm) が入っている。14はよく似た形であるが「ホタル液」・「中村號」とあり、実態は不詳。15~17は桃谷順天館の「白色美顔水」で、底に桃にとまるトンゴの絵がある (高橋1998)、1914 (大正3) 年7月から発売されたもの。18も同社の別の化粧瓶である。19・20にも同様の絵が見られる。「美顔水」と書かれたラベル付き資料 (津田・村田1986) からみて、1902 (明治35) 年から発売の「美顔水」であろう。19・20は肩から頭部にもみ型吹き痕を認める。21~24は同じ形で口縁部内面をすりつぶしている。21に桃谷順天館の標があるので、同社のものである。煉り白粉の瓶らしい (加藤1976)。25は「標商専用」の下に楓の葉の絵があり、「屋倉小」と書かれている。26の「小倉油」・「椿白」と書かれたものにも楓の葉が共通するので、おそらく1907 (明治40) 年の滑稽新聞や1914 (大正3) 年の興味雑誌の広告にある「をぐら屋・白椿」と同一の大阪の会社であろう。27は草叢の鈴虫の絵と「油香虫鈴」の字から、1914年の月刊不二に載っている島村大阪支店が販売中のものこと (鈴虫印香油) であろう。栓も残っていて、栓の下部はコルク、その他は銅らしい。コルクの上側に円盤状のものがありこれは外周に刻み目が巡り、内側に「☆TOILET☆油香虫鈴」とある。1/3ほど香油が残っている。福岡県松崎城跡から報告例がある (森井1998)。28も香油瓶か? 29は「志らが赤毛染/ナイス」、底に「TM」とある。1910 (明治43) 年から大正9年の新聞広告にみられ、大阪市心斎橋の丹平商會が主に女性を対象に販売した頭髮染毛剤である。30は東京市日本橋区平尾贊平商會のほんのり色白くなる化粧液のレートフードで、1915 (大正4) 年4月に発売された。「レートフード」・「L A I T F O O D」の字、底には菱形の中にHとSの組み合わせがある。31は不詳。1912 (明治45) 年6月2日の東京日日新聞にあるような平尾贊平商會のレート白粉か? 32は虎印の銘がある。化粧瓶か? 33は香水入れか? 34には「油香ハサ」・「4」とある。大阪の南久宝寺町、佐原忠次郎発売のサハラ香油の広告が1901 (明治34) 年から1907 (40) 年の滑稽新聞にあり、この頃から大正くらいにかけてのものか? 35・36も同形でありサハラ香油。

薬瓶 37は蓋。「社会資合薬製鮮朝」と書いてあり、戦前のもの。38~54は医者薬。このうち51・52・53には「加藤病院」とあるが、調査区の南約200mのところ1960 (昭和35) 年まで加藤病院が存在していた。55は書かれているように「參天堂薬房」の「大学目薬」である。1897 (明治30) 年參天堂薬房が東京帝国大学大学付属病院に目薬の試作を依頼し、開発したものを大学目薬として発

売したものである。先端に綿棒をつけた細いガラス管が薬液の入った容器の脇に添えられ、これで見の上に垂らしたらしい。目薬は昭和になってゴムを押す方式に変更され、さらにプラスチック容器になったのは1962(昭和37)年である(サライ1995による)。56は「メグスリ/点眼水」・「生盛美剤」と書かれた円形瓶である。55と併行ないしはその前半頃のものだろう。57は「精神薬」とあり、頭の薬か? 58は「丹平商会」の「心臓丸」。1907(明治40)年の萬朝報に広告がある。59の神経脳病薬の「ブライン」は大阪市塩町柳澤薬館の製品で、1805(明治38)年の滑稽新聞に広告がある。60~67は用途等不詳。60は口縁部内面を擦りつぶしている。68は丹平商会の健脳丸。1896(明治29)年鎮静剤と緩下剤を組み合わせた便秘薬として発売を開始し、現在に至る。上部に「阪大」、下に「丹平商会製」。69~76は用途不詳。73は口縁端部を折断後磨いている。75は口縁部内面を擦りつぶしている。77~79はスポイド。80~113は丸薬類の容器。多種多様な丸薬が生産されていたので、ラベルがなければ製品名は判別しがたい。製作方法から二つに分類しておく。二枚合わせの型の中に吹き込んで口縁部で折断し、端部を処理したA類(80~99)と丸く吹いた球形硝子を偏平にするため二枚の板で挟み、口縁部は折断しただけのB類(100~113)とがある。A類のほとんどは薄い水色の透明を呈し厚手である。口縁部処理は加熱して加工したものが主体となり、他に小剥離を繰り返す例(6・14・15・18)、加熱後外側だけ剥離整形するもの(9・19・29)が少しある。B類は薄く無色透明で口縁部は筒の中に吹き込んだためか管状をなす。すべて無色透明である。114は1907(明治40)年から1919(大正8)年の萬朝報に広告がある大阪市道修町小西久兵衛薬房の栄養剤である。インク瓶 115~127はインク瓶であろう。様々の形のものが見られる。ペン挿し部が片側に寄っている121・122は大正頃のものであろう。底にMとあるのは東京市丸善インクの製品である。丸善は1878年からインクを製造販売しているが(美濃部 1996)、炭燻例はもっと新しいようである。119・120には型吹き痕を認めない。

清涼飲料水類 128・129は用途不詳だが、可能性としてここに入れた。HANAFUSAと書いたものであろうが、2点ともFの横棒が抜けている。側面から下にかけて口縁部端まで型跡が残る。端部は折断のままである。130~139は玩具屋や夜店で見かけるニッキ水のたぐいの容器か? 口縁部処理は折断のままになっている。139は寒天をストローで吸う容器か?(1944年生まれの水水宗昭氏の御教示)。139の胴体部分は縦に2分割した型を合わせているが、これ以外のものは3分割である。

ランプ 140~142は別個体であろうランプの各部分である。140は無色透明のホヤで、上下は加熱処理している。141は油入れて無色透明。縦に3分割の型合わせを使用。上の立上り部分外面に精銅色のさびが付着し、下面には青黒色の硝子が融着している。142は台座で縦方向2枚の型合わせを利用してはいる。

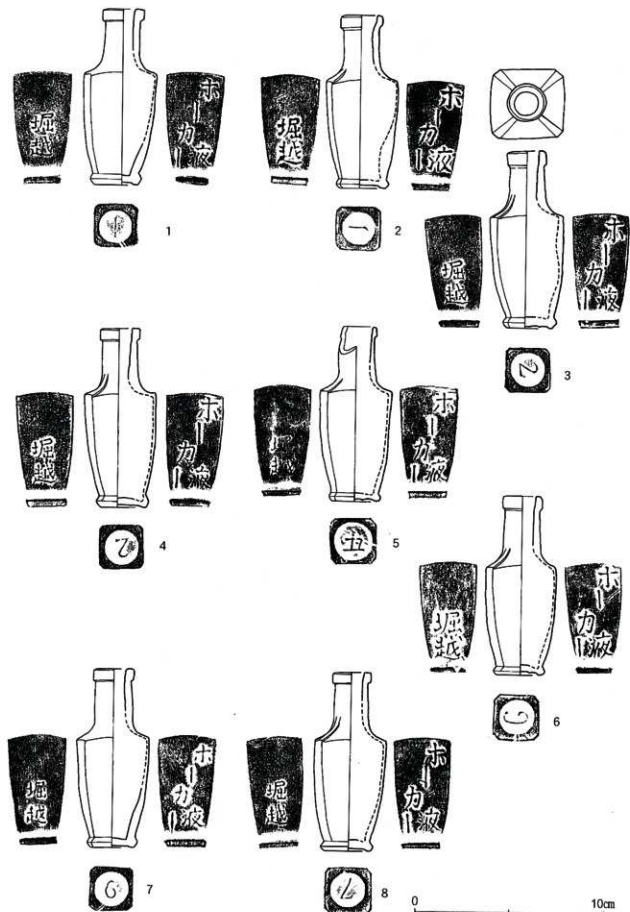
調味料 143は鈴木商店の味の素である。1909(明治42)年から販売されているが(美濃部 1996)、報告例には複数の形態がみられる。1928(昭和3)年の国民新聞広告に143の形の瓶が描かれており、年代の一端を押さえられる。

糊容器 144は口縁端部を折断後雑に磨いている。ヤマト糊は「創業者である木内弥吉が明治の終わり頃に開発し、販売したもの」(美濃部 1996)である。145は糊容器あるいはインク瓶であろう。肩の横線から上に型吹き痕が残る。

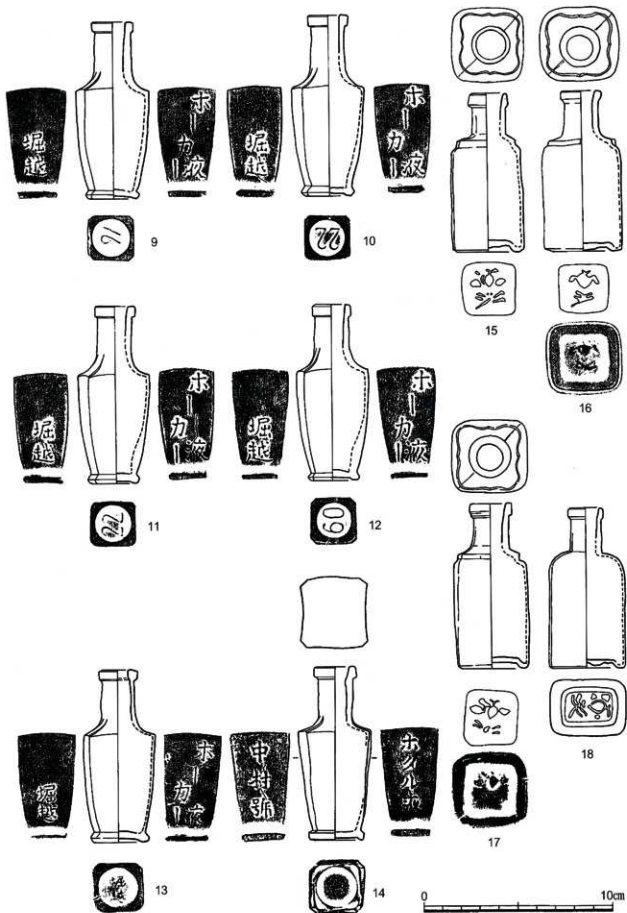
ウィングラス 149は脚部。

蓋 150・151は容器と密着する部分を擦りつぶしている。薬瓶の蓋であろう。

用途不明 146・148は合わせ目が折断しただけの上端まで残り、146は底に「鈴」と書いてある。
(高橋 信武)



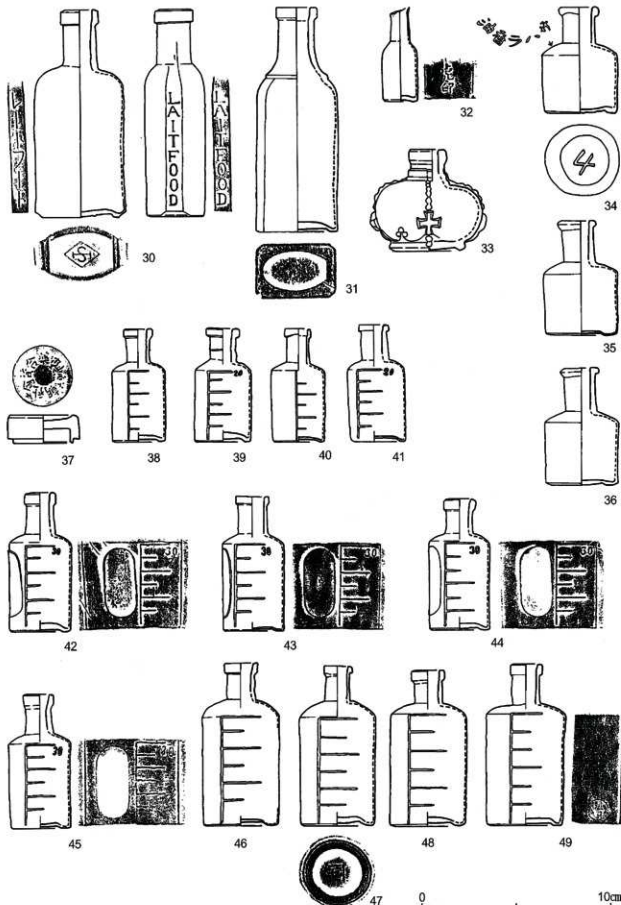
第62图 II区SK1出土硝子製品① (1/2)



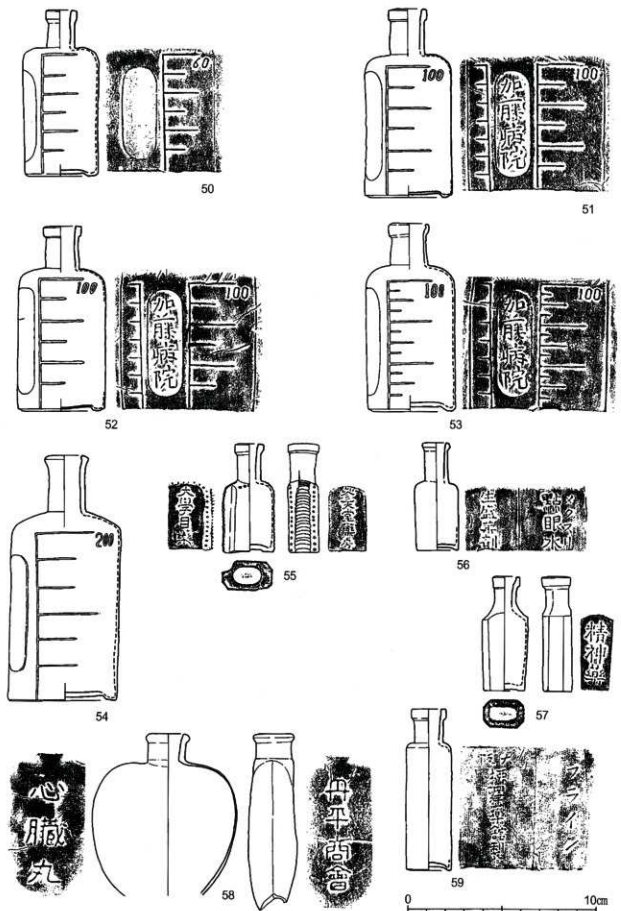
第63图 II区SK1出土硝子製品②(1/2)



第64图 II区SK1出土硝子製品③(1/2)



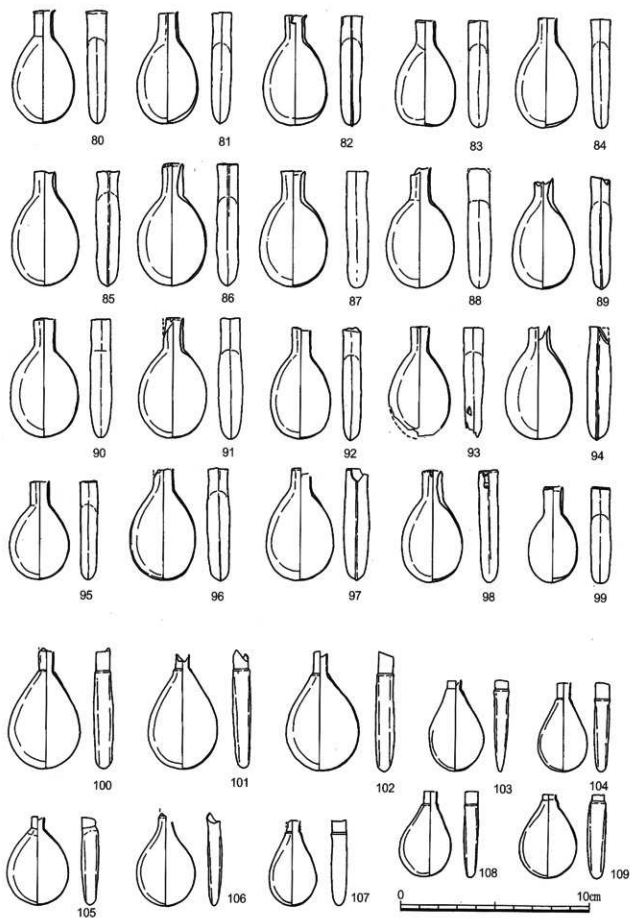
第65图 II区SK1出土硝子製品④ (1/2)



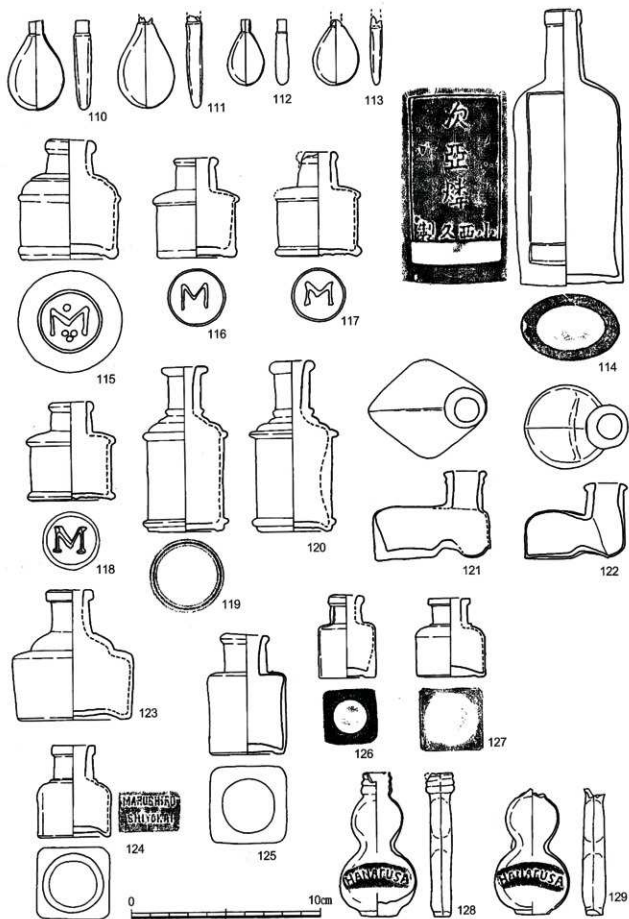
第66图 II区SK1出土硝子製品⑤ (1/2)



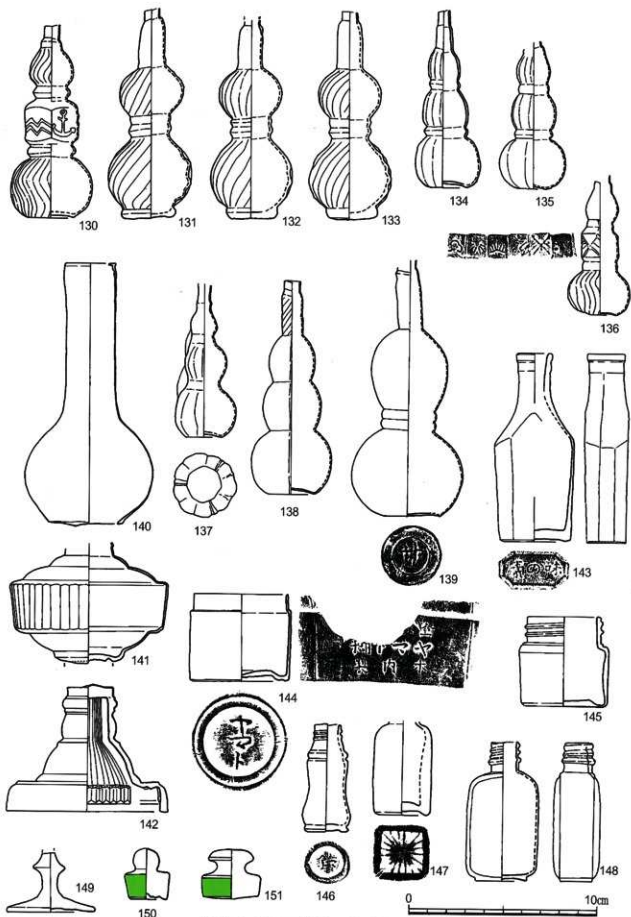
第67图 Ⅱ区SK1出土硝子製品⑥ (1/2)



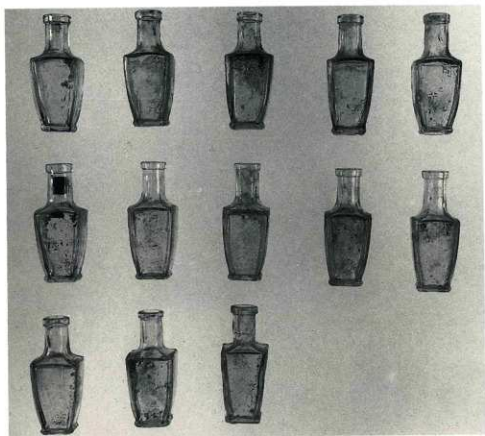
第68图 II区SK1出土陶器製品⑦(1/2)



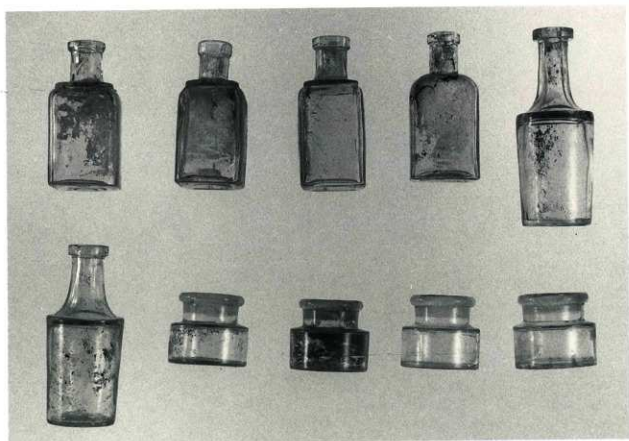
第69图 II区SK1出土硝子製品⑧ (1/2)



第70图 II区SK1出土硝子製品⑨ (1/2)



硝子製品 1



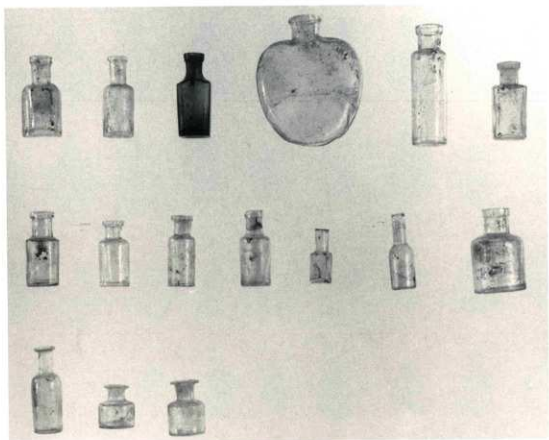
硝子製品 2



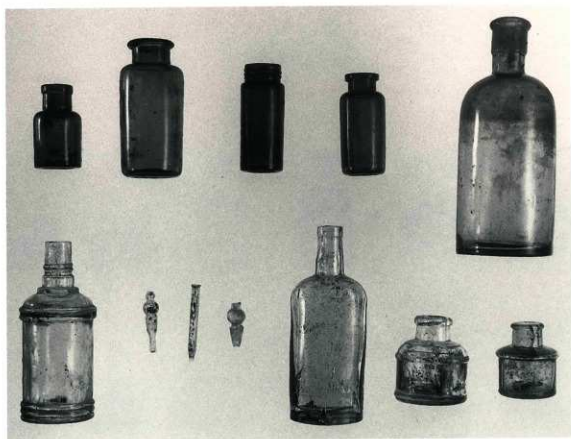
硝子製品 3



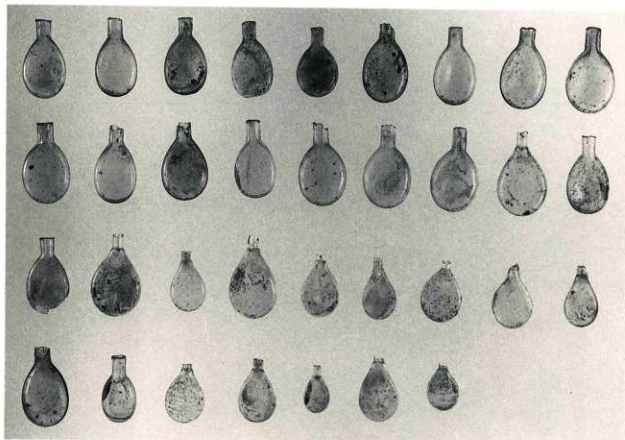
硝子製品 4



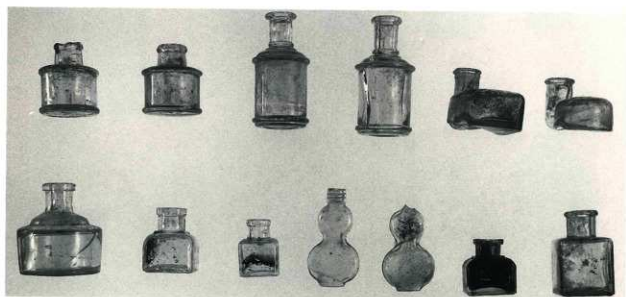
硝子製品 5



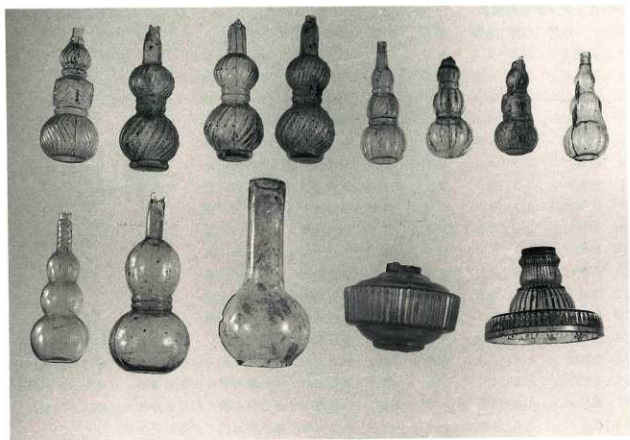
硝子製品 6



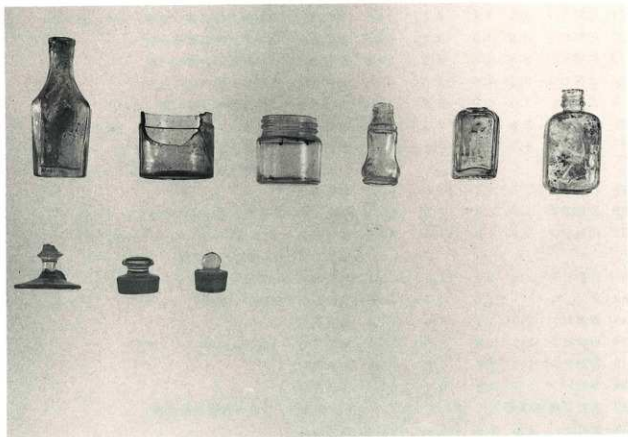
硝子製品 7



硝子製品 8



硝子製品 9



硝子製品 10

SK1出土硝子製品観察表

※単位はcm・g

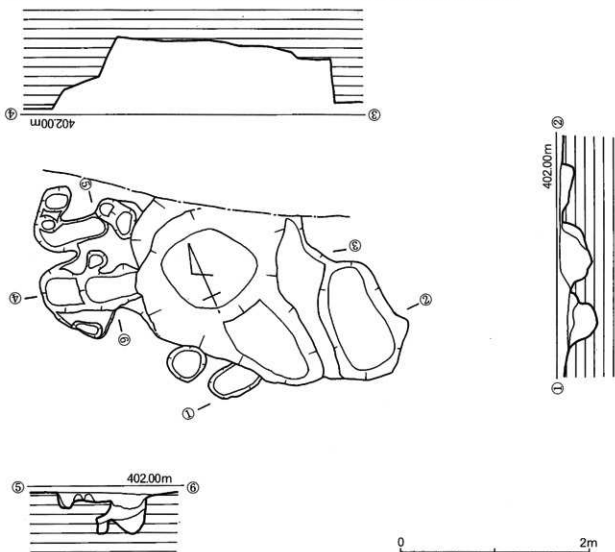
図No.	器種	口径	底径	高さ	重量	備考
1	化粧ビン	2.2	2.7	9.3	76.4	無色透明・「ホーカー液」
2	化粧ビン	2.2	2.8	9.2	96.2	無色透明・「ホーカー液」
3	化粧ビン	2.1	2.9	9.5	91.5	無色透明・「ホーカー液」・内面に赤色の痕跡
4	化粧ビン	2.1	2.8	9.5	90.5	無色透明・「ホーカー液」
5	化粧ビン	2.2	2.8	9.2	74.0	無色透明・「ホーカー液」・ラベルあり
6	化粧ビン	2.1	2.7	9.5	80.1	無色透明・「ホーカー液」
7	化粧ビン	2.2	2.7	9.5	93.4	無色透明・「ホーカー液」・中にコルク栓
8	化粧ビン	2.1	2.8	9.5	79.4	無色透明・「ホーカー液」
9	化粧ビン	2.2	2.8	9.4	88.8	無色透明・「ホーカー液」
10	化粧ビン	2.2	2.8	9.6	79.6	無色透明・「ホーカー液」
11	化粧ビン	2.2	2.8	9.4	90.1	無色透明・「ホーカー液」
12	化粧ビン	2.1	2.8	9.4	83.9	無色透明・「ホーカー液」
13	化粧ビン	2.1	3.1	9.2	77.8	無色透明・「ホーカー液」
14	化粧ビン	2.3	2.9	9.2	75.9	無色透明・「ホタル液」・側面の横断面がくぼむ
15	化粧ビン	2.1	3.8	8.4	84.9	無色透明・桃谷順天館の白色美顔水・{桃にトンボ}
16	化粧ビン	2.2	4.1	8.5	68.4	無色透明・桃谷順天館の白色美顔水・{桃にトンボ}
17	化粧ビン	2.3	3.8	8.8	74.2	無色透明・桃谷順天館の白色美顔水・{桃にトンボ}
18	化粧ビン	1.9	4.0	8.5	56.8	無色透明・桃谷順天館・{桃にトンボ}
19	化粧ビン	2.4	3.9	10.4	92.5	無色透明・桃谷順天館の美顔水・{桃にトンボ}
20	化粧ビン	2.4	2.9	11.4	116.6	無色透明・桃谷順天館の美顔水・{桃にトンボ}
21	化粧ビン	4.1	4.7	4.2	44.8	無色透明・桃谷順天館の練り白粉・{桃にトンボ}
22	化粧ビン	3.8	4.5	4.0	39.3	無色透明・桃谷順天館の練り白粉
23	化粧ビン	3.8	4.6	4.1	39.8	無色透明・桃谷順天館の練り白粉
24	化粧ビン	3.8	4.6	4.1	42.8	無色透明・桃谷順天館の練り白粉
25	香油ビン	2.0	4.2	8.4	70.4	無色透明・「標商用専{楓の葉}屋倉小」
26	香油ビン	2.5	6.1	7.3	147.5	無色透明・「白椿」・「小倉油」・{楓の葉}
27	香油ビン	1.9	4.0	10.8	105.3	無色透明・「油香虫鈴」と{叢の鈴虫}・青銅の蓋に「TOILET・油香虫鈴」・蓋の下端にコルク栓
28	香油ビン?	2.5	4.3	11.6	99.8	無色透明
29	白髪染め	1.7	2.8	7.7	26.6	無色透明・「志らが赤毛染 ナイス」・「TM」
30	化粧ビン	2.0	4.8	11.0	80.8	無色透明・「LAITFOOD」「レートフード」・{菱形の中にHとS}平尾賛平商会
31	化粧ビン	2.2	4.4	11.9	116.1	無色透明・平尾賛平商会のレート白粉か?
32	?	1.6	4.1+	4.9	無色透明	側面に「虎印」
33	香水ビン	2.0	4.1	5.4	74.4	無色透明
34	香油ビン	2.2	3.8	5.6	50.1	無色透明・「油香ラハサ」・「4」
35	香油ビン	2.1	3.8	6.1	27.6	無色透明
36	香油ビン	2.1	3.8	6.2	33.8	無色透明
37	薬ビン蓋	最大径3.8	高1.5	重さ24.0	無色透明	・「社会資合薬製鮮朝」
38	薬ビン	1.6	2.9	6.0	23.8	無色透明

図No.	器種	口径	底径	高さ	重量	備考
39	葉ビン	1.8	2.0	6.1	23.3	無色透明
40	葉ビン	1.4	2.8	6.0	21.1	無色透明
41	葉ビン	1.7	2.4	6.2	19.8	無色透明
42	葉ビン	1.7	2.3	7.4	27.7	無色透明
43	葉ビン	1.8	3.2	5.1	28.0	無色透明
44	葉ビン	1.7	2.2	7.0	24.4	無色透明
45	葉ビン	1.6	3.1	7.1	30.8	無色透明
46	葉ビン	1.8	3.9	8.7		無色透明
47	葉ビン	1.6	4.0	8.5	34.8	無色透明・「セ」と鉤括弧
48	葉ビン	1.8	4.0	8.3	40.4	無色透明
49	葉ビン	1.7	4.0	8.6	42.0	無色透明・丸の中に不中字
50	葉ビン	1.7	3.9	8.8	42.8	無色透明
51	葉ビン	2.1	4.6	10.0	54.8	無色透明・「加藤病院」・「100」
52	葉ビン	2.0	4.6	9.8	58.2	無色透明・「加藤病院」・「100」
53	葉ビン	1.7	3.9	8.8	53.7	無色透明・「加藤病院」・「100」
54	葉ビン	2.3	5.7	13.0	92.2	無色透明・「200」
55	目薬	1.6	2.8	5.8	21.7	無色透明・「参天堂薬房」・「大学目薬」
56	目薬	1.5	2.2	5.7	17.5	無色透明・「メグスリ 点眼水」・「生盛：剤」
57	葉ビン	1.5	2.2	6.1	18.5	紫色半透明・「精神薬」
58	葉ビン	2.4		8.6+	81.5	無色透明・「心臓丸」・「丹平商会」
59	葉ビン	1.9	2.9	8.6	27.6	無色透明・「ブライン」・「阪大 柳沢薬館製」
60	葉ビン?	1.7	2.3	5.4	20.5	無色透明・口縁内面摺り
61	葉ビン?	1.7	2.1	5.3	20.7	無色透明
62	葉ビン?	1.5	2.2	4.9		無色透明・側面に「Y」
63	葉ビン?	1.6	1.9	5.1	12.1	無色透明
64	葉ビン?	1.4	2.2	5.5	16.7	無色透明
65	葉ビン?	1.0	1.6	4.0	8.5	薄水色透明
66	葉ビン?	1.1	1.8	5.5	6.9	薄水色透明
67	葉ビン?	1.5	2.0	6.2	12.7	薄水色透明
68	葉ビン	2.0	3.7	5.4	40.3	人物の中に「健脳丸」・「阪大 丹平商会」
69	葉ビン?	1.8	2.6	3.0	7.8	無色透明・口縁内面摺り
70	葉ビン?	2.1	2.6	3.7	10.5	無色透明・口縁内面摺り
71	葉ビン?	2.3	3.5	6.2	50.2	薄黄茶色透明・底面に菱形の中に「一」
72	葉ビン?	2.5	4.3	10.2	58.6	薄黄茶色透明・胴部断面は楕円形
73	葉ビン?	2.7	3.2	8.1	42.9	薄黄茶色透明・口縁部折断後に磨き・「HとOの組合わせ」
74	葉ビン?	2.6	3.2	7.6	49.0	薄黄茶色透明・菱形の中に「S」
75	葉ビン?	3.0	7.0	22.3	224.0	青あめ色透明・口縁内面摺り
76	?	1.9	5.4	13.3	232.6	無色透明・(鶴)の絵の上にS..NOMURA 下にTRADE MARK
77	スポイド	最大径1.4	長さ3.3	重さ2.2		無色透明・下部外面に摺り
78	スポイド	最大径1.2	長さ4.7	重さ1.6		無色透明・中部外面に摺り・上端は折断
79	スポイド	胴径0.6	長さ5.9	重さ1.4		無色透明・上は加熱により平坦・下は折断

図No.	器種	口径	幅	高さ	重量	色(丸葉ビンについて)
80	丸葉ビン	1.1	3.3	6.0	10.6	薄水色透明・型吹きの一休整形(80から99まで)
81	丸葉ビン	1.0	3.2	5.9	11.1	薄水色透明
82	丸葉ビン	1.2	3.4	5.9	12.6	薄水色透明
83	丸葉ビン	1.0	3.2	5.6	9.7	薄水色透明
84	丸葉ビン	1.0	3.3	5.8	10.7	薄水色透明
85	丸葉ビン	1.2	3.5	6.1	14.1	薄水色透明
86	丸葉ビン	1.1	3.7	6.5	17.2	薄水色透明・口縁部整形は剥離整形
87	丸葉ビン	1.3	3.6	6.1	15.2	薄水色透明
88	丸葉ビン	1.1	3.6	6.4	14.0	薄水色透明
89	丸葉ビン	1.0	3.5	5.9	8.0	薄水色透明・口縁部整形は剥離の繰り返しによる
90	丸葉ビン	1.2	3.6	6.3	11.5	無色透明・口縁部整形は剥離の繰り返しによる
91	丸葉ビン	1.1	3.6	6.4	12.0	無色透明
92	丸葉ビン	1.0	3.2	5.9	11.3	薄水色透明・口縁部整形は剥離の繰り返しによる
93	丸葉ビン	1.1	3.3	5.8	10.8	薄水色透明・口縁外面は剥離、内面は加熱整形
94	丸葉ビン	1.2	3.6	6.0	16.7	薄水色透明
95	丸葉ビン	1.0	3.2	5.2	8.9	薄水色透明
96	丸葉ビン	1.1	3.5	5.9	15.4	薄水色透明・口縁部整形は剥離の繰り返しによる
97	丸葉ビン	1.1	3.6	6.3	14.3	薄水色透明
98	丸葉ビン	1.1	3.4	6.0	10.9	薄水色透明
99	丸葉ビン	1.1	2.6	5.1	6.2	無色透明・口縁部整形は外面剥離、内面加熱
100	丸葉ビン	0.8	3.8	6.4	9.1	無色透明・管と球の連結で全て折断(113まで同じ)
101	丸葉ビン	0.7	3.7	5.6		無色透明・折れている
102	丸葉ビン	0.8	3.9	6.4	8.2	無色透明
103	丸葉ビン	0.7	2.9	4.8	3.2	無色透明
104	丸葉ビン	0.8	2.6	4.7	3.7	無色透明
105	丸葉ビン	0.7	3.2	4.7		無色透明
106	丸葉ビン		3.2	5.0	5.8	無色透明・折れている
107	丸葉ビン	0.8	2.6	4.6	6.0	無色透明
108	丸葉ビン	0.7	2.7	4.6	3.3	無色透明
109	丸葉ビン	0.7	3.1	4.5	4.1	無色透明
110	丸葉ビン	0.7	3.0	4.8	5.6	無色透明
111	丸葉ビン	0.7	3.0	4.8	4.8	無色透明
112	丸葉ビン	0.5	1.9	3.5	2.5	無色透明
113	丸葉ビン	0.6	2.5	3.5	2.2	無色透明
114	清涼飲料	1.9	5.4	14.6	207.6	青あめ色透明・「次亜燐 製久西小」
115	インクビン	2.7	5.3	6.4	94.4	底面に「M」と点4個・無色透明・内面に黒色痕
116	インクビン	2.4	4.3	5.3	57.3	底面に「M」・緑色透明・内面に黒色痕
117	インクビン	2.2	4.6	5.5	60.2	底面に「M」・緑色透明
118	インクビン	2.4	4.6	5.2	59.3	底面に「M」・緑色透明
119	インクビン	2.5	4.0	8.8	111.6	型吹き?・無色透明
120	インクビン	2.4	4.0	9.0	114.6	型吹き?・無色透明

図No.	器種	口径	幅	高さ	重量	色
121	インクビン	2.3	長さ5.3	幅5.2	4.7	75.3g・緑色透明
122	インクビン	2.3	長さ5.5	幅4.5	4.0	44.8g・緑色透明
123	インクビン	3.5	6.1	6.9	141.9	緑色透明
124	インクビン	2.3	3.8	4.9	45.5	紫色透明 側面に「MARUSHIRO SHIYOKAI」
125	インクビン	2.6	4.0	6.5	80.2	内面に黒インク?痕・緑色透明
126	インクビン	1.9	3.0	4.5	28.4	無色透明
127	インクビン	2.4	3.8	4.2	42.0+	内面に紫色付着・無色透明
128	飲料	1.5	1.9	7.7	27.0	「HANAFUSA」・折断・無色透明
129	飲料		1.7	6.8	23.4+	「HANAFUSA」・無色透明
130	飲料	0.8	最大幅4.3	10.2	26.2	側面3分割型合わせ・上折断・6角形部に錨・ジグザグ・薄水色透明
131	飲料	0.8	最大幅4.6	11.2	30.5	同上・同上・薄水色透明
132	飲料	0.8	最大幅4.3	10.6	34.2	3分割・薄水色透明
133	飲料	0.8	最大幅4.4	11.0	29.4	3分割・薄水色透明
134	飲料	0.6	最大幅3.5	9.4	14.2	3分割・薄水色透明
135	飲料		最大幅3.5	7.8	12.4	3分割・無色透明
136	飲料		最大幅3.3	7.4	11.0	3分割・薄水色透明
137	飲料	0.7	最大幅3.2	8.2	12.9	3分割・薄水色透明
138	飲料	0.8	最大幅4.2	11.4	18.9	3分割・薄水色透明
139	飲料	1.0	最大幅6.0	13.6	53.7	「サ」・薄水色透明
140	ランプ	2.7	6.8	13.9	33.8+	上下折断後加熱整形・無色透明
141	ランプ	2.6	3.8	6.4	53.5	3分割型合わせ・無色透明
142	ランプ	2.5	8.6	6.8	113.8	2分割型合わせ・無色透明
143	調味料入	1.5	2.4	5.7	75.1	「素の味」・透明
144	糊容器	5.0	5.3	4.7	59.0	無色透明・上端は折断後雑な磨き・「登 糊トマヤ 製内木」・「ヤマト」
145	糊容器	3.9	4.6	4.8	55.6	無色透明・肩より上に合せ目あり・内面に黒インク?痕
146	甘味料?	1.4	2.3	5.8	25.7	「鈴」・口縁部折断のまま
147	用途?	1.6?3.0		5.0+52.1		無色透明
148	蓋	径2.4	高さ2.7	19.1g		透明型吹き 側面磨り・低中央折り取り・無色透明
149	ワイングラス	底径4.8	高さ3.2+25.1g			無色透明
150	薬ビン蓋	つまみ径1.4	最大径2.4	高さ2.7		摺り・無色透明
151	薬ビン蓋	つまみ径2.4	最大径3.2	高さ2.7		摺り・無色透明

SK2 (第71図) 調査区北西部にある複数の土坑が重複したものである。出土遺物としては、器種不明の陶器片があり、これにより大正時代から昭和時代前半期の遺構と思われる。



第71図 II区SK2実測図 (1/40)

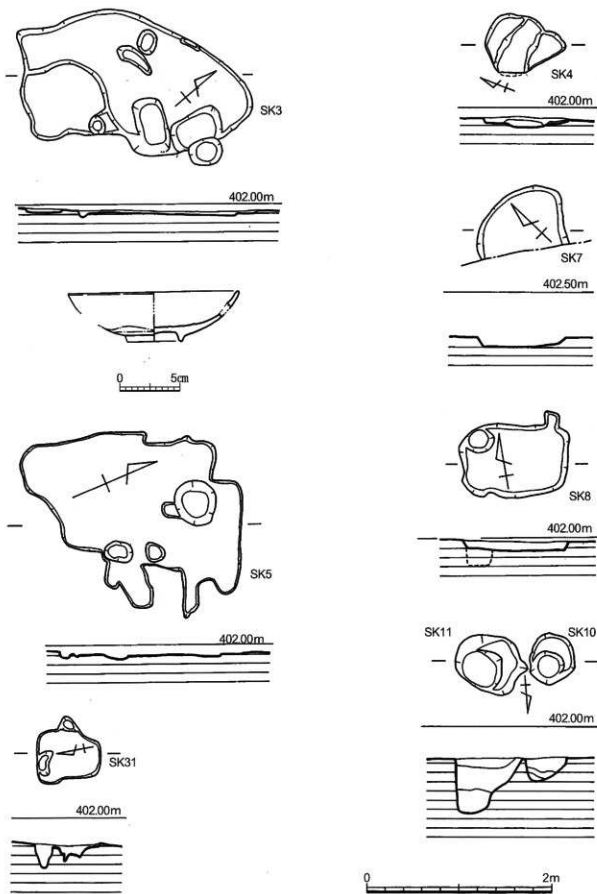
SK3 (第72図) Y22区に位置する不整形土坑である。規模は長径2.5m、短径1.5m、深さ0.15mである。出土遺物には陶器皿があるが、産地・詳細な年代は不明である。当該遺構は、幕末から明治時代の時期幅の中で構築されたものである可能性が高い。

出土遺物 (第72図) 図示することができたものは、陶器皿1点である。内外面に緑灰色の釉を施し、底部付近は露胎となる。また、見込みは蛇ノ目輪刺ぎとなる。産地と詳細な年代は不明であるが、幕末から明治時代の製品と推定される。

SK4 (第72図) X23区に位置する不整形土坑である。規模は長径0.9m、短径0.7m、深さ0.15mである。出土遺物が存在しないため、遺構の時期は不明である。

SK5 (第72図) Y22~Y23区の境界付近に位置する遺構である。不整形な形状であることから、人為的な掘り込みでない可能性も考えられる。内部には柱穴状の掘り込みが数個認められた。出土遺物は認められない。

SK6 (第49図) Y23区に位置する土坑である。規模は長径0.7m、短径0.5m、深さ0.1mである。出土遺物は認められない。



第72图 II区SK3 (1/20) 4·5·7~11·31实测图 (1/40)

SK7 (第72図) Y23区に位置する土坑である。南側は調査区域外に伸びる。規模は長径0.9m、短径0.7m、深さ0.1mである。出土遺物は認められない。

SK8 (第72図) Y23区に位置する土坑で、平面形態は隅丸方形を呈する。規模は長径1.1m、短径0.8m、深さ0.1mである。この遺構からも出土遺物は認められない。

SK9 (第74図) Y22区に位置する不整形土坑で、規模は長径2.5m、短径1.6m、深さ0.3mである。出土遺物には陶器の土瓶・土鍋(近現代)、肥前産の磁器染付くわんか碗(18世紀後半)など、江戸時代後期から大正時代前後までの遺物を含む。遺構の詳細な時期は不明である。遺構の形態が不整形であり、時期の異なる遺物が混在しているため、切り合い関係にある複数の遺構を同一遺構として掘り下げた可能性も考えられる。

SK10・SK11(第72図) 遺構記号には便宜上SKを用いているが、いずれも柱穴状の遺構である。SK10は径0.45m、深さ0.2m、SK11は径0.45m、深さ0.6mを測る。SK10からの出土遺物は認められないものの、SK11からは、幕末までに生産されたと推定される産地不明の陶器皿の破片がある。従って、SK11の年代は近世以降に比定される。

SK12(第73図) Y23・Y24区の境界付近に位置する遺構である。掘りあがりの状態での遺構の平面形態から、重複する複数の柱穴状の掘り込みを同一土坑として掘り下げてしまった可能性が考えられる。埋土中から18世紀後半以降に比定される肥前波佐見系磁器碗が出土している。

出土遺物(第73図) 図示した遺物は肥前波佐見系磁器染付碗である。見込みは蛇ノ目輪剥ぎとなる。製作年代は18世紀後半以降に比定される。

SK13(第73図) Y23区に位置する遺構である。この遺構も重複する複数の柱穴状の掘り込みを同一土坑として掘り下げた可能性が考えられる。出土遺物は認められない。

SK14(第73図) Y23・Y24区の境界付近に位置する遺構である。これも重複する複数の遺構を同一土坑として掘り下げた可能性が考えられる。出土遺物は認められない。

SK15(第73図) Y24区に位置する遺構である。これは複数の遺構が重複している可能性が高い平面形態となっている。出土遺物は認められない。

SK16(第73図) Y23区に位置する掘り込みで、径0.4mを測る。底面のレベルが一定せず、人為的でない掘り込みを遺構と誤認した可能性が考えられる。出土遺物は認められない。

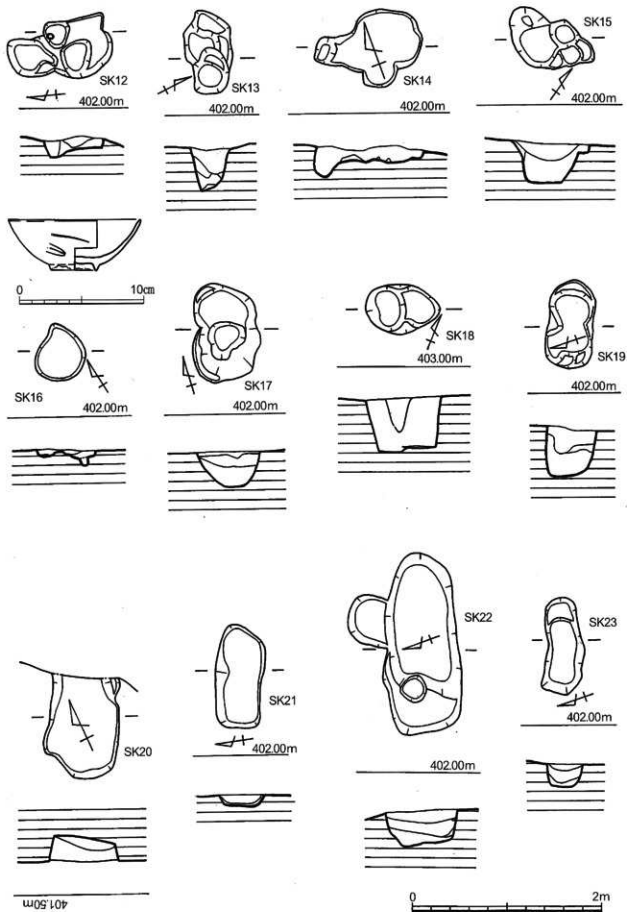
SK17(第73図) X24区に位置する土坑で、規模は長径1.0m、短径0.6m、深さ0.4mである。出土遺物は認められない。

SK18(第73図) X24区に位置する遺構で、規模は長径0.8m、短径0.5m、深さ0.6mである。重複する2基の柱穴を一土坑として掘り下げた可能性が高い。図示していないが、埋土中より肥前磁器染付碗の小片が1点のみ出土している。

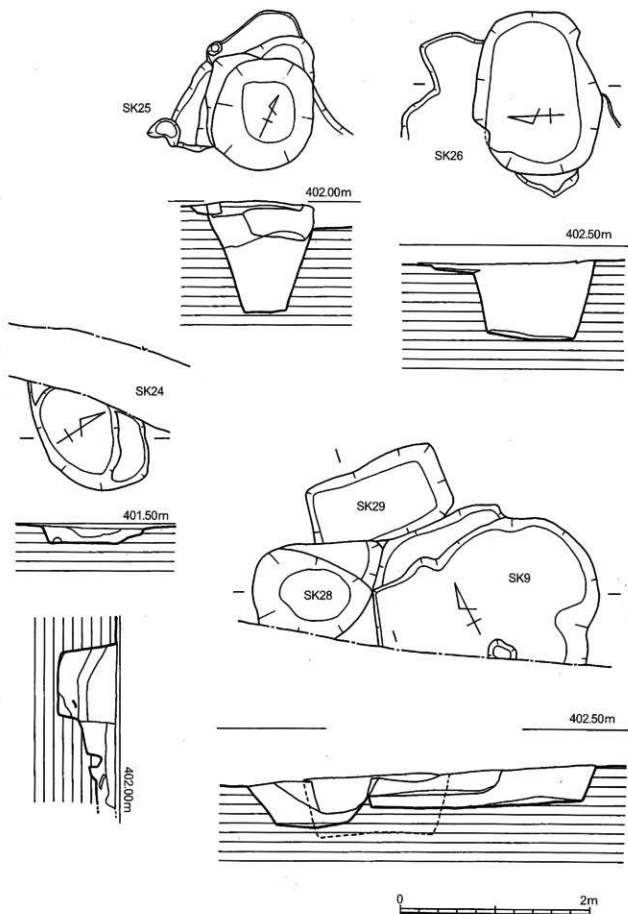
SK19(第73図) Y24区に位置する遺構で、規模は長径0.9m、短径0.5m、深さ0.5mである。これも重複する複数の柱穴を一土坑として掘り下げた可能性が考えられる。出土遺物は認められない。

SK20(第73図)

X25区に位置する土坑で、北側はさらに調査区外に伸びる。規模は長径1.1m、短径0.7m、深さ0.35mである。出土遺物は認められない。



第73图 II区SK12~23实测图 (1/40)



第74图 II区SK9·24~29实测图 (1/40)

SK21 (第73図) Y24区に位置する土坑で、規模は長径1.1m、短径0.5m、深さ0.15mである。出土遺物は図示していないが、ゴム印の装飾技法を施す磁器製品が存在しており、遺構の年代は大正時代から昭和時代前半期に比定できる。

SK22 (第73図) Y24区に位置する土坑で、規模は長径2.0m、短径0.8m、深さ0.4mである。北側では柱六穴の掘り込みと切り合い関係を有する。出土遺物は図示していないが、銅版転写技法による磁器皿およびゴム印技法による磁器皿などが認められることから、遺構の年代は大正時代から昭和時代前半期に比定できる。

SK23 (第73図) Y24区に位置する土坑で、規模は長径1.0m、短径0.4m、深さ0.25mである。出土遺物は認められない。

SK24 (第74図) Y24区に位置する土坑で、規模は長径1.6m以上、短径1.0m、深さ0.2mである。出土遺物は認められない。

SK25 (第74図) Y24区に位置する土坑で、2号竪穴と重複関係にある。規模は長径1.3m、短径1.1m、深さ1.3mである。他の土坑と比較すると、深さが際立って深く、井戸状遺構あるいは水溜の機能を有するものであるのかもしれない。出土遺物は認められず、遺構の時期は不明である。

SK26 (第74図) Z25区に位置する土坑で、規模は長径1.7m、短径1.3m、深さ0.8mである。出土遺物は図示していないが、陶器皿、幕末までに生産された肥前産の磁器端反碗、明治時代の印判染付碗などが認められ、最新のものとして肥料袋が出土した。遺構の年代は現代である。

SK27 (第75図) X24・X25区の境界付近に位置する土坑で、規模は長径1.6m、短径1.4m、深さ0.8mである。出土遺物は認められない。

出土遺物(第75図) 1は肥前産の磁器染付碗(くらわんか碗)で、18世紀後半の製品である。2は産地不明の陶器碗で、外面に薰灰釉、内面に鉄釉を施す。底部付近は露胎となる。詳細な製作年代は不明であるが19世紀代のものであろう。他に小片であるため、図示していないが、明治時代の印判染付なども存在する。

SK28 (第74図) Y22区に位置する土坑で、SK29と切り合い関係を有する。規模は長径1.2m、短径0.8m、深さ0.5mである。出土遺物は認められない。

SK29 (第74図) Y22区に位置する土坑で、SK28と切り合い関係を有する。平面形態は長方形を呈する。規模は長辺1.8m、短辺0.8m、深さ0.5mである。出土遺物は図示していないが、陶器土瓶、明治時代の印判染付碗などが認められることから、遺構の年代は明治時代前半期に比定できる。

SK30 (第75図) Z25区に位置する土坑で、規模は長径1.8m、短径1.2m、深さ0.6mである。出土遺物は少量であるが、製作年代が最も新しいものが明治時代の印判染付である。

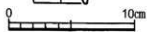
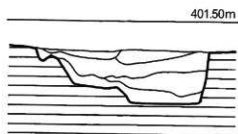
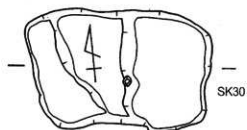
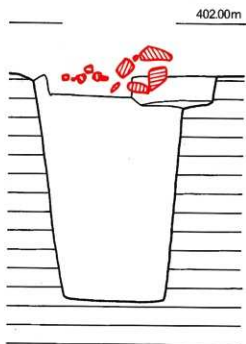
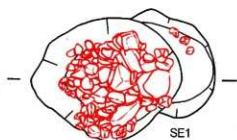
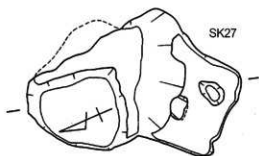
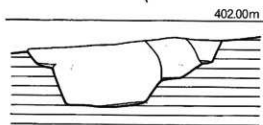
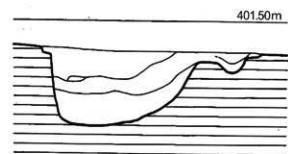
SK31 (第75図) Y22区に位置する土坑で、出土遺物は図示していないが、江戸時代後期以降に生産された肥前産の白磁紅血片などが認められる。遺構の年代は幕末までに比定される可能性が高い。

4. 井戸

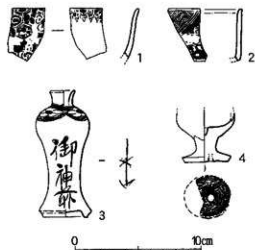
SE1 (第75図) Y23区に位置する井戸状の遺構で、規模は長径1.6m、短径1.3m、深さ2.4mである。1号竪穴の床面で検出し、上面には頭〜傘大の礫を集積していた。出土遺物は認められず、遺構の時期は不明である。

5. 溝状遺構

SD1 (第49図) Y25区に位置する溝状遺構で、規模は長さ9.7m前後、幅1.3m前後、深さ0.15~0.6m前後である。出土遺物の中で、最も新しいものが明治時代の印判染付であるため、遺構の年代は明治時代前半期に比定できる。また、遺物の中にヨーロッパ産軟質磁器皿片があり、注目される。



第75图 II区SK27·30·31 (1/40) ·SE1 (1/20) 实测图 (1/40)



第76図 SD1出土陶磁器 (1/3)

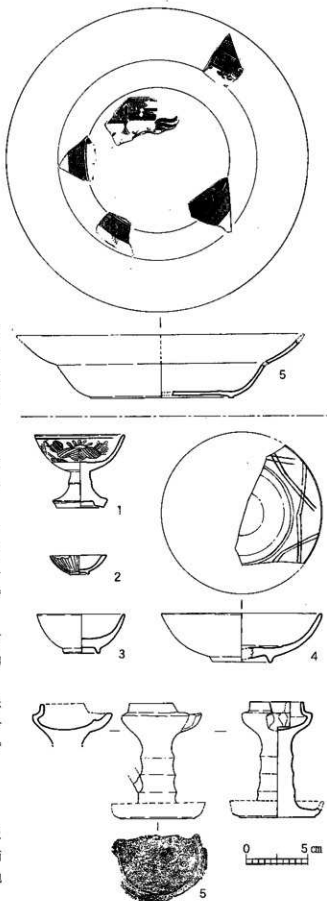
出土遺物 (第76図)

1は明治時代の印判染付磁器端反碗の口縁部で、製作年代は明治時代前半期(1870~1880年代)に比定される。2は肥前産の磁器色絵段重で、18世紀後半以降の製品である。3は肥前産の磁器色絵瓶類で、19世紀代の製品である。胴部外面に「御神前」の文字が描かれている。4は関西系陶器陶器灯火具で、胴部内外面に灰釉を施す。製作年代は19世紀代である。5はヨーロッパ産軟質磁器皿で、5個の破片が確認された。これらは同一個体で、内面に「ウイロウ・バーター」と呼ばれる中国風の樓閣山水文が転写されている。外面に文様はなく、内底部にもマークや銘款は認められない。19世紀代の製品である。

SD2 (第49図) X25~Y25区に位置する階段状の遺構で、溝状遺構の半分が調査区内にある疑いからSDとした。規模は長さ5.3m、幅1.4m、深さ0.3mである。出土遺物は図示していないが、陶器土瓶や明治時代の印判染付があり、遺構の年代は明治時代前半期に比定できる。

6. 階段状遺構

調査区西側のY22区にあり、断面図4のように西側に下がる階段状の場所である。その西側にも東部より一段低い部分があり、遺物を包含していた(西段包含層と称した)。



第77図 西段包含層出土陶磁器 (1/3)

西段包含層 調査区西側(X・Y-21・22区)で遺物包含層が検出された。出土遺物は江戸時代後期から幕末までの時期幅の中で製作されたものが大半を占める。図化可能なものを提示しておく。

出土遺物(第77図)

1は肥前産の磁器色絵仏飯器で、19世紀代の製品である。2・3は肥前産の磁器紅皿で、2は型打ち盤形により菊花形を象った白磁製品である。また、3の内面には紅が僅かに残存している。いずれも18世紀後半以降の製品である。4は肥前産の磁器染付皿で、18世紀後半代に比定される。5は肥前産の陶器灯火具で、製作年代は19世紀代に比定される。(吉田 寛)

第6章. ま と め

今回の炭燼遺跡の発掘調査によって、いくつかの知見が得られた。年代的には、炭燼遺跡には縄文時代早期前半(約9,000年前)・前期(約6,000年前)・後期後葉(約3,000年前)・晩期末(約2,500年前)、弥生時代後期(約1,800年前)、古墳時代(1,500年前)、江戸時代、明治以降という系統的ながら、ここを生活の場とした人々がそれぞれの時代にいたことが分かる。調査区の東側半分(I区)に見られた古い時代のもは、道路を挟んだ西側(II区)にはなかったが、もともとなかったのではなく江戸時代はかなり造成工事を行なって、古い遺跡を削り取ってしまったようである。具体的には、II区では大部分の場所で表土の下はすぐにいわゆるローム層が現れる状態であった。遺物の存在から言えば、江戸時代以降、現代に至るまでは連続的に存続している。

縄文時代

縄文時代早期の上器、特に接合作業の結果、かなりの部分を復元できたコブ付きの土器は常識を覆すものであった。これまでこのように良好な資料は発見されておらず、コブは漠然と一対2個あるものだと考えていたが(調査担当者もそう考えていた。一般的には例えば次のような例がある。「無文土器の器形は有文土器のそれとほぼ等しいものと、胴部がやや張って口縁部が内傾し、口縁部外面の2方向に瘤状の突起を張り付けるものがある。」(水ノ江1998))、意外にも一つの土器に9個のコブが想定できたのである。その結果、福岡市柏原F遺跡で出土した、口縁部の下に刺突文が一条通り、その下に小さなコブを1~4個並べるとされるもの(柏原式土器)との距離が確実に狭まった。無文土器にしばしば見られるコブが何に由来するのかわかりませんが(坂本1998)、今回の土器の確認によりさらに説明しやすくなってきた。炭燼遺跡から出土した刺突文を巡らす土器とコブを巡らす土器とは、すべて別個体のようなものである。底部は出土していないが、現状の形からみて狭い角度の尖底であろう。北部九州の草創期末から早期初めの土器編年を検討した綿貫俊一氏は、草創期末の二日市Ⅰ式に続き押型文が登場するまでの東北部九州の土器を6段階(二日市Ⅱa式→二日市Ⅱb式→高並垣式→野田山式→二日市Ⅲ式→備弓式)に分け、柏原式を二日市Ⅱb式から高並垣式までの間に並行しそうだとしている。また、コブ付き土器は二日市Ⅲ式に属すが(従って押型文土器の頃には存在しない)、刺突文土器については触れられていない。コブ付き土器が押型文土器(稲荷山式)まで残るのか(坂本1998・水ノ江1998他)、否かは残された課題であろう。

弥生時代

弥生時代には溝に取り囲まれた集落が営まれたようである。炭燼遺跡の北側の久住町地域には別府湾周辺と熊本系統の土器が流入しているが、本地域は両者の影響があまり認められない大野川流域の圏内に属していた状況がみとれる。5号住居跡のような柱穴配置は大野川流域の竹田市菅生台地や、荻町、大野町等に類例が多く、密接な関係が存在したのであろう。磨製石礫は緑泥片岩を素材とした



第78図 萬朝報掲載広告の化粧瓶

ものが主体であるが、一部茶色の石材が存在する。大野川流域の弥生遺跡ではきわめて珍しいのではないと思う。时期的にやや古い、弥生中期の熊本県西原村谷頭遺跡では茶色の石材が主体であった記憶があり、同じ種類の石材を利用したのであれば、これも今後の検討課題である。

古墳時代

古墳時代にも堅穴住居が営まれていた。古墳時代の集落が多い大野川流域では、須恵器を出土する時期には堅穴住居が激減するので、炭電遺跡で5世紀代の須恵器が出土したのはこの地域では極めて珍しい事例である。

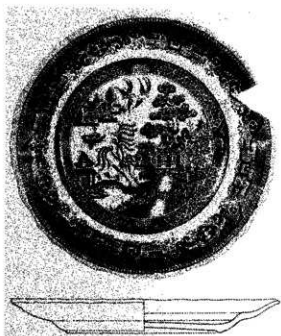
近世

江戸時代の遺物は本遺跡では18世紀後半から始まる。遺構の面では 区は西部で次第に地形が下がって行き、SD3・SD4がもっとも低い地点となる。SD3の西側では急に高まっている(第48図の断面図4)。SD3は調査区の南壁と同じ高さで続くようであるが、Y22区の南西部は東側と同じ高さを保っていて、「西段」と称した部分が平面的には凹字状を呈し東側に向かって階段状に高くなることになる。この付近の性格としてSD3を道路と考え、西段を屋敷への入り口に想定しておきたい。西段では礫が多量に散乱していたが、石垣が使われていてその裏込め材だった可能性がある。これらの年代は西段から出土したものは18世紀後半が主で、1点19世紀代の遺物が混じるのみであり、江戸時代に屋敷があったことを裏付けるものと考えられる。平坦面では多数の小さい穴を検出したが、本来これらからなる建物があつたのであろう。残念ながら、復元することはできなかった。

SD1からは幕末に遡る可能性のあるヨーロッパ産軟質磁器皿1個体が出土した。共伴遺物は18世紀後半以降の肥前産磁器色絵段重・19世紀代の肥前産磁器色絵瓶・明治時代前半の印判染付磁器端反碗である。なお、類例は東京都汐留駅跡(第:図,石崎1997)・福岡県小倉城下町の「常盤橋西勢宿り跡」(山口1999)、長崎市出島和蘭商館跡その他で知られている。

近代以降

明治以降の陶磁器・硝子製品が多量に廃棄されていた土坑は、本文中でも述べたように1949年に引越していった北側の民家の一括廃棄物と考える。硝子製品の報告は最近多い。ホーカール液の報告例は



第79図 炭竈遺跡出土西洋陶器の類例(汐留遺跡)

少なくないが、ラベル付きは本例が唯一であろう。明治以降の広告にみるそのラベルは、よく似た二種類があり年代差は広告からは判明しない。本例のラベルにはホーカーの字が入り、第78図右側のものである。なおこの他の参考資料として、今回出土した資料のうち白色美顔水・レートフードの大正時代の広告を掲げた(第78図)。当時流行の化粧品であるが、極一部を除いて現代人はそのような品物が昔あったことを知らない。今回、報告にあたり考古学以外の書物にも目を通したが、新発見ともいべきものもいくつかあった。現代産業の証拠品として、また、遺構の年代を推定する編年材料として、硝子製品の性格を究明し年代を確定しておくことが今後ますます必要になっていくだろう。

坂本嘉弘1998「東九州の押型文土器研究の現状と課題」『九州の押型文土器 論攷編』縄文集成シリーズ3 九州縄文研究会

水ノ江和同1998「九州における押型文土器の地域性」同上

山口信義1999「常勢橋西勢溜り跡」北九州市埋蔵文化財調査報告書第229集 (財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室

綿貫俊一1999「九州の縄紋時代草創期から早期の土器編年に関する一考察」『古文化談叢』第42集 古文化研究会

石崎俊哉他1997「汐留遺跡Ⅰ」東京都埋蔵文化財センター調査報告第37集

※SK1硝子製品の項

(引用文献)

加藤孝次 1976「明治大正のガラス」光芸出版

津田紀代・村田孝子1986「モダン化粧史 粧いの80年」ポーラ文化研究所

1995「サライ」『モノ語り 目録』小学館

高橋雅夫 1997「化粧ものがたり」雄山閣

美濃部達也1996「百人町三丁目遺跡」新宿区遺跡調査会

森井啓次 1998「松崎城跡」福岡県文化財調査報告書第135集

報告書抄録

ふりがな	すみかまどいせき							
書名	炭壘遺跡							
副書名	県道白丹竹田線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	大分県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第110輯							
編著者名	高橋信武編 高橋および吉田 寛執筆							
編集機関	大分県教育委員会							
所在地	〒870-1113 大分県大分市府内町3-10-1 097-536-1111 (内5501)							
発行年月日	2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市 町 村	遺跡番号					
すみかまどいせき 炭壘遺跡	たけだしおおるぞ 竹田市大字 すみかまど 炭壘	44208	539158	30°58'05"	131°18'30"	1998.5.26 ～ 1998.12.2	1500㎡	道路面積
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
炭壘遺跡	集落	縄文時代早期 前期 後期 晩期 弥生時代後期 古墳時代後期 近世 近現代	集石1基 竪穴住居跡10基 溝状遺構 1条		刺突文・コブ付き 塞の神式 竊式 三万田式 磨製石鏃 須恵器 陶磁器類 硝子類一括		コブ付き土器の復元品 ヨーロッパ陶器 硝子類一括	

炭 竈 遺 跡

— 県道白丹竹田線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —
大分県文化財調査報告書第110輯

発 行 日 2000年3月31日
編 集 大分県教育庁文化課 (文化財資料室)
〒870-1113
大分市大字中判田字ビワノ門1977番地
TEL.(097)597-5675
発 行 大分県教育委員会
〒870-0021
大分市府内町3丁目10番1号
TEL.(097)536-1111(内5501)
印 刷 日の丸印刷株式会社
